

「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査」中間報告

山際秀紀・池田貴夫・会田理人・青柳かつら・尾曲香織・舟山直治・鈴木明世

Key Words

地域資源 (Local resources)、産業史 (Industrial history)、民俗 (Folk life)、建築史 (Architectural history)

1 はじめに

本稿は、北海道博物館（以下、当館）が進める「道民・地域との協働・連携による地域情報集積プロジェクト」の一つである「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査（研究期間：2020～2024年度、研究代表者：山際秀紀）の中間報告である。

第二次世界大戦を一つの区切りとして、その戦中・戦後の復興期から高度経済成長期にかけては、日本全体で社会が大きく変動した時代であった。しかし、終戦から80年近く経った現在において、その時代を生き抜いた人びとから、当時の生活の記憶を聞き取ることのできる時間はすでに限られている。特に、戦争に関わる生活体験の記録は各地で蓄積されてきている一方で、日常の生活に関しては、その多くが見過ごされ、記録に残されてこなかった事象も多岐にわたるものと推定される。

また、当館は北海道立の総合博物館であり、時代や地域を限定せず、ひろく北海道全体の自然・歴史・文化について調査研究や資料の収集等を進めている。それらの成果は、展示や普及事業をとおして道民に還元することが常に求められている。

以上を背景に、本研究プロジェクトでは、戦中・戦後の混乱期から復興過程、その後の高度経済成長期に至る期間を主たる対象として、道民生活の変遷について、道内各地域において総体的な情報集積を行うとともに、特に日常の生活についてこれまで記録されてこなかった記憶の聞き書きを重点的に進めていくことを大きな目的としている。一方で、本研究プロジェクトにおいては「戦後」という期間を、上記混乱期から高度経済成長、その後のさまざまな社会的な変化を経てなお、現在まで続くものと捉えている。また、「戦前」も戦中・戦後の時代に続く礎を築いた期間として位置づけており、主たる対象期間に限定せず、必要に応じてひろい視点をもって調査を行うものである。そして、それらの成果を基に、当館総合展示の充実に向けた検討や、その他展示、普及事

業等を行い、調査成果の還元を行っていく予定である。

なお、本研究プロジェクトは、2015～2019年に実施した「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」のメンバーが継続するとともに、新たに建築担当者をメンバーに加え進めていくものである。

(山際秀紀)

2 本研究プロジェクトの概要

(1) 調査テーマとメンバー構成

本研究プロジェクトでは、研究目的の達成に向けて、北海道において培われてきた産業・生業・生活文化等のくらしに係る物質的・非物質的な歴史の変遷を記録化するために、さまざまな世代からの聞き書き調査等を実施していくことを共通認識としている。その上で、主たる対象期間を意識しつつも、ひろい時代の範囲の中で担当者の専門分野における課題を基に、調査テーマを設定した(表1)。

(2) 調査の方法

本研究プロジェクトは、前述のとおりメンバーのそれぞれの課題設定に基づいて調査を実施しているが、調査にあたっては道民からの依頼(資料寄贈の相談、工場や施設の閉鎖に関する情報等)に基づいて調査を実施した事例もある。また、特別展や企画テーマ展などの博物館活動における課題を発展させた調査テーマもある。

調査テーマに応じて、担当者もしくは数名で現地を訪問した。また、担当者以外の職員を含めて複数名で調査を実施した際には、それぞれの調査テーマだけでなく協力しあうなど、調査が円滑に進むように努めた。調査手法は多岐にわたるが、主に話者の方からの聞き取り調査に重点を置くとともに、必要に応じて写真・動画撮影による記録、資料や建造物の実測、文献・新聞資料調査などを実施した。

本稿では、2020～2023年度にメンバーがそれぞれ実

表1 本研究プロジェクトにおける調査テーマと担当者

番号	調査テーマ	担当	専門分野
1	農業に用いる道具・機械等に関する調査	山際秀紀 (チーフ)	産業史 (農業)
2	昭和期の農林業・商工業・生活文化等の記憶に関する調査	青柳かつら	産業史 (林業)
3	北海道日本海沿岸地域のニシン漁・磯まわり漁に関する調査	会田理人	産業史 (漁業)
4	鉄工業及び装蹄・蹄鉄に関する調査	山際秀紀	産業史 (農業)
5	信仰、祭祀、民俗芸能、行事等に関する調査	尾曲香織 舟山直治	民俗 民俗
6	寒冷地における生活用具に関する調査	池田貴夫	民俗
7	行商と食に関する調査	尾曲香織	民俗
8	北海道への移住者の建築文化に関する調査	鈴木明世	建築学

施した調査内容と現時点での整理が必要な課題について、調査テーマに沿って報告する。

なお、文末に本稿に記載されている地名をまとめた地図を付す(図3)。

(山際秀紀)

3 各テーマの調査報告

(1) 農業に用いる道具・機械等に関する調査

本研究プロジェクトで山際は、2015年からの研究プロジェクトで調査していたリンゴや稲作・畑作の農家(山際 2023a : 79-88, 2022b : 3-3)、馬関係の道具などに関する聞き書き調査を継続しているほか、新たに湿地に関する聞き取り調査を進め、成果の一部は展示会と普及行事等で公表した。

① リンゴ農家について

■余市町で日本初のスピードスプレイヤー導入

スピードスプレイヤー(以後は、SSと略す)とは機械動力の薬剤噴霧機であり、リンゴの袋掛けを省く現在の無袋栽培に貢献した。日本で最初のSSは、1955年に余市町の宮本晋司が輸入したものである。このSSは、埼玉県農研機構農業技術革新工学研究センターに保管されているのを確認した(山際 2020 : 4-5)。

山際は、2018年度に、リンゴ農家から寄贈を受けた一括資料を元に企画テーマ展(2018年9月21日~11月25日)を開催した(山際 2018 : 2-3)。開催期間中、見学者から得た情報により、余市町独特の収穫袋は宮本晋司がアメリカから持ち帰って、複製を作り普及したも

のと明らかになった。さらに、宮本晋司の親族(妹)から収穫袋を収集した。2023年には、札幌市手稲区在住の宮本晋司の親族(弟)から、戦後のリンゴ栽培の転機となった1955年(昭和30年)前後の農場の様子について、次のように聞き取り調査を行なった。

「戦後の人手不足が深刻で、袋掛けの人数確保が難しくなったことなどが、兄がSSを導入した理由であった。父が経営していた時には宮本農場とあったが、兄が三愛農場という名前に変えた。この農場は、余市町豊丘町のヌッチ川の西側の日当たりがよい斜面と、川の上流側の南側の丘陵、東側の丘陵地があった。兄は、アメリカ製のトラクターとSSを購入した後も、トラクターなどを増やし続けて機械化を進めたが、結局は冷害や台風が何年も続いたことで、借金がかさみ土地を手放すことになった。

トラクターを使う前(SSを導入した1955年以前)は、馬でプラウを使って耕した後、ハローで土を砕いていた。その頃、馬は3頭くらい飼っていた。リンゴ畑の木の下は、いつもふかふかに耕されているのが普通だったが、今はリンゴの木の下には草が生えている」と、昔と現在のの違いを含めてリンゴ農家の様子を語ってくれた。

■札幌市豊平区平岸で苗木栽培をしたリンゴ農家

2023年度に行なった平岸のリンゴ農家(2018年企画テーマ展へ写真提供)調査では、戦中から1955年(昭和30年)頃までの生活について聞き取りした。特に、ネズミという害獣への対処と肥料について、次の知見を得た。

害獣駆除については、「木造で土壁のリンゴの倉庫は、一度ネズミが複数ではいると急速に増えた。夏の終わり頃に大体100坪位ある倉庫からリンゴを全部出してネズミ取り(トラバサミ)を仕掛けていた。1年で1つの倉庫からネズミ150~160匹、リンゴ箱(20kg位入る箱)がいっぱいになった」という。このトラバサミについては、第21回企画テーマ展「森のちゃれんが宝箱」(開催期間:2024年2月10日~4月7日)の展示の一部で公開した。

肥料については、「人糞尿は肥料として買い、市街地を中心に汲み取った。農期は手が回らないため、農閑期の初冬に木の箱(肥箱)に人糞尿を入れて馬籠で運んだ。畑の片隅の地下に大きな樽を埋め、肥箱の後方側面の栓を抜いて樽へ人糞尿を移した。溜めた下肥は、天秤棒で肥箱2つを担ぎながら、リンゴの木1本に柄杓で4~5杯ずつまいた。苗木の育成には肥料が不可欠だった」という。

これらのリンゴ農家からの聞き取り調査の一部は、2023年の札幌市豊平館『文化財・歴史資産に関する講

座』「北海道のリンゴの歴史」（2023年9月8日）で公表した。

（山際秀紀）

② 旧男爵資料館の資料及び建築調査

旧男爵資料館は、1983年の開館から2013年に閉館するまで、男爵いもの生みの親である川田龍吉（1856-1951）の功績や関連する史資料を約5,000点展示していた。この資料館は、旧川田農場跡地にある木造畜舎や敷地内に建設された新館を活用し運営されていた（写真1）。2019年に、男爵いも発祥の地として知られる清香園がある縁から、七飯町にある道の駅「なないろ・ななえ」の敷地内に「THE DANSHAKU LOUNGE」が開設され、その中で旧男爵資料館の資料を用いた展示が行われている。しかし、大型資料を中心とする多くの資料がまだ旧男爵資料館で保管された状態であり、そのような中、2022年9月9～11日に管理者である男爵倶楽部及び、七飯町歴史館の協力を得て、山際・鈴木が調査を行った。



写真1 旧男爵資料館全景

2022年度の調査では、男爵倶楽部及び男爵資料館元管理人への聞き取り調査や、保管されている資料の全体状況把握、旧男爵資料館の木造牛舎や木造サイロ等の建造物の実測調査に向けた建物規模の把握等を行った。

聞き取り調査や資料調査から、農機具の多くは、大正期に川田龍吉が恒産社を設立してから、主にアメリカなどから船で輸入したものであることや、木造牛舎や木造サイロも同様に、輸入した図面や建築書を参照して建設したと考えられることなどの、資料や建造物の由来について把握した。また、1951年に川田龍吉が亡くなり、現男爵倶楽部会長の父に恒産社（恒産組殖産KK）と農場が譲渡され、男爵資料館の開設に至ったなどの開館経緯を聞き取りした。

なお、2022年度の調査は事前調査にとどめ、今後、それら旧展示資料の詳細な使い方の調査や資料収集の検討に加え、建造物の実測記録調査等を行う予定である。

詳細な成果については、この調査が終了次第報告する。
（鈴木明世）

(2) 昭和期の農林業・商工業・生活文化等の記憶に関する調査：高齢者の地域知を活用した地域学習プログラム開発と巡回展事業

① 研究の目的と方法

近年、北海道では、大幅な人口減と高齢化が進行しており、自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が心配されている。解決の方策の1つとして、高齢者が持つ地域独自の知識（地域知）を積極的に活用して、地域の個性や誇りを産み出す地域学習を各地へ拡げることが重要である。さらには、地域博物館がこの拠点として、知識の集積や人材の交流の場となれば、超高齢社会における博物館の役割発揮につながる。

こうした着眼から、本研究と科研費研究「少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発（2018～22、研究代表者：青柳かつら）」と連携させて、士別市朝日町と名寄市智恵文にて、高齢者らと協働で地域学習プログラムの開発・実践を行ったほか、2021～22年度にはこれを普及する道北地区巡回展示会と関連講座を開催した。2023年度は、朝日町と展示会開催地であった美瑛町で、わら細工の利用や戦後の酪農業の変化に関する地域知を収集するサロンと聞き取り調査を行った。

② 地域学習プログラムの開発と巡回展

プログラム開発・実践では、朝日町の朝日郷土資料室、同室のボランティア組織である、知恵の蔵運営委員会、智恵文の智恵文公民館、智恵文中央老人クラブと連携した。この結果、開発した15のプログラムを試行する行事を、朝日町で12回、智恵文で14回開催できた（表2、写真2）。内容は、サロン（思い出を語る談話会）、体験（手指を動かす工作等、写真3）、世代交流の区分にて、林業、農業、商工業、生活文化などに関わる農山村の地域資源を幅広く取り上げた。

表2 地域学習プログラムの実施概要

区分	テーマ	種別	実施回数(回)	
			朝日町	智恵文
林業	林業労働：馬追いの集材技術	サロン	1	
	林業労働：丸太運搬の道具	サロン	1	
農業	綿羊の飼育、羊毛ストラップづくり	サロン、体験	1	1
	羊毛の利用、羊毛から毛糸を紡ぐ	サロン、体験	1	1
	馬の生産と飼育	サロン、世代交流		1
	馬を使った米づくり	サロン、世代交流	1	2
商工業	装飾所・でんぶん工場	サロン	1	1
	木工場・鉄工場	サロン	1	1
	証職	サロン	1	1
生活文化	開拓期の食、きな粉もちづくり	サロン、体験		1
	昭和期の食	サロン	1	1
	開拓期の学校生活、紙石盤に字を書く	サロン、体験		1
	昭和期の学校生活	サロン	1	1
環境	暖房用具と冬のくらし	サロン	1	
	天塩川の恵みと災害	サロン、世代交流	1	2
			計	12 14

巡回展事業では、「探してみよう！地域のお宝」をタイトルに、冬山造材、緬羊飼育と利用、馬を使った米づくり等を題材にして、道北4市町（士別市、名寄市、美深町、美瑛町）で展示会を開催し（写真4）、観覧者からの地域資源への関心・知識獲得等の評価を得ることができた。同事業の関連講座では、テーマに関連する地域映像の活用と地域知の収集ができた。

③ 地域知の収集

サロンでは、例えば、以下のように高齢者の地域知が語られた。林業地として発展した朝日町では、馬追いや木直し人夫の経験者により、造材作業で使われた「ヒツキリン」とよばれるトビ、そして、ツメの付いたトビの使い方について、「鋭利なヒツ刃の部分が、てこの原理を働かせ、丸太を楽に動かせる」「ツメが丸太に食い込みトビが滑らなくなる」といった従来品と比べての利点が語られた。てこの原理で丸太を動かすトビは、刃の先端部が特に重要であることを示す「トビ先三寸（約9.9cm）」という言葉も挙げられた。こうした回想は、1928年より朝日町で営業し、高品質のトビ製造者として有名だった後藤鉄工場のトビ製品のカタログを見たり、資料室の実物資料を手にして、動作を再現しながら行われた

一方、緬羊生産地としての歴史を持つ智恵文では、緬羊に給餌する女性が写る昭和期の写真を見ながら、緬羊は気質がおとなしく、女性や子どもが飼育を担い、厳冬期は、仔羊を茶の間に入れて大切に飼育したこと、また家で20頭もの緬羊を飼育していた男性からは、地区の有名な緬羊生産家だった山口 長氏（1908年生まれ）に指導を受けながら、性質のよい仔羊を入手してタネメノウ（種牡羊）として育成した記憶などが語られた。

地域学習プログラム開発や聞き取り調査の成果は、学術誌（青柳・山下 2020：212-212、青柳ほか 2022：47-66）・普及誌（青柳 2022：2-2）にて公表したほか、プログラム事例集・調査報告書（青柳ほか 2023a）、リライト資料集（青柳ほか 2023b）等を作成した。これらは調査地の関係組織機関に報告し、ウェブ公開して普及を図った。②③の事業を通じて、1) 高齢者の健康づくり、2) 地域の歴史文化の記録・保存（アーカイブ）、3) 高齢者と若い世代の交流・文化伝承といった事業目的を達成できた。

④ 今後の発展方向

調査地では、活動の担い手である高齢者の高齢化が進展し、後継者の確保が重要となっている。例えば、戦後の産業や暮らしの変化に関連する、物資不足下の学校生活、農林業の機械化、高度経済成長期といった学習テ



写真2 サロン「林業労働：馬追いの集材技術」（朝日町）



写真3 体験「緬羊の飼育と利用：羊毛から毛糸を紡ぐ」（智恵文）



写真4 巡回展士別会場（士別市立博物館撮影）

マを練り込み、昭和10年代後半～20年代生まれ以降のより若い世代も参画していける地域知収集を、地域博物館と連携・協力しながら進めていくことが課題である。

（青柳かつら）

(3) 北海道日本海沿岸地域のニシン漁・磯まわりの漁に関する調査

会田は、2003年以降、北海道日本海沿岸地域におけるニシン漁や磯まわり漁で使用される漁具について調査を実施してきた。本稿では、これまでに調査を実施した調査結果の整理を進めるなかで、これまで未公表のままであった磯まわり漁に関する調査記録をもとに、コンブ漁・ウニ漁に関するもの、とりわけ利尻町仙法志地区の事例を報告する。

① コンブ漁に関すること

利尻町仙法志地区在住で、磯まわりの漁を営むMさん（1928年生まれ）を中心に漁や漁具・漁法についてお話を伺うとともに、Mさんが所有する磯まわり漁具を拝見し、計測をさせていただき使用方法などを伺ってきた。

Mさんは仙法志地区の、海岸から目と鼻の先にある場所にお住まいで、主に夏の期間にリシリコンブ（以下「コンブ」）やウニの採取に従事している。また、自家用としてテングサやモズク、ナマコ採りを行なうこともある（会田 2022：4-5）。

Mさんは自宅近くの海岸から肉眼でははっきりと姿が確認できるような距離の海上で磯船に乗り、箱メガネをのぞきながらコンブが繁茂している良い場所を探し出す。漁師はそれぞれに良い場所を把握しており、Mさんにも他人には秘密にしている場所があるという。

採取には「ネジリ」（Mさんの呼び名）や「コンブ鎌」を用いる。「ネジリ」は先端が「ハ」の字型をした採取具で、「ハ」の字部分にコンブを巻き絡めて、海中から引き上げる。一度に多くのコンブを採ることができるが、その分体力の消耗が激しい。Mさんが使用する「ネジリ」は全体の長さが2mから4mぐらい、竿（本体）は金属製、「ハ」の字部分はFRP製のもの。海底までの深さに応じて、柄を継ぎ足したり、取り外したりして調整する。コンブを巻き取る時に「ネジリ」をねじる（回転させる）ために、手元側（海上側）には長さ50cmほどの木製のハンドル（Mさんは「ウダ」と呼んでいた）がついている。

「コンブ鎌」は、1枚1枚コンブの根元を切り取って採取するための道具で、刃渡りが25cm前後のものをMさんは使用していた。「コンブ鎌」は、「ネジリ」ほど効率良く採取はできないが、質の良いコンブを丁寧に採取することができること、Mさんのような年配者でも無理なく採取できることが良い点であると語っていた。

2011年の聞き取り調査では、Mさんがかつて使用していた木製の「ネジリ」（写真5）は、「ハ」の字部分はヒノキ（粘りがあって強い）、竿はシウリ（堅くて粘りがあり海中で泡がでない）、「ウダ」はホウノキ（軽



写真5 Mさんがかつて使用していた「ネジリ」（ヒノキの枝を利用）



写真6 Mさん宅の倉庫に保存されていたヒノキの枝

くて強い）を組み合わせたものが使いよかったという。ヒノキ、シウリは利尻では自生していない樹木で、島外から購入・入手していた。特にヒノキは、青森県・秋田県で農業や林業を営む方が出稼ぎに来ていた時の縁で、枝打ち後の廃棄してしまう枝を送ってもらっていたという（写真6）。ホウノキは自生していないわけではないが、曲がったものばかりでとても使いものにならないことから、材料を購入していたという。

コンブ採りが終わると、自宅近くの干場で1枚1枚丁寧に並べて干していく。Mさんが言うには、マッカを使うと一度にたくさんのコンブが採れるので効率は良いが、コンブに傷がつきやすい。コンブを丁寧に採るなら、鎌の方が傷がつきにくいという。雨が降っていても、コンブ採りの旗があがればコンブ採りをやる。

② ウニ漁に関すること

利尻島の周辺ではエゾバフンウニとキタムラサキウニが採れる。Mさんは日常の会話のなかで、エゾバフンウニのことを「ノナ」、エゾムラサキウニのことを「ガンゼ（ガゼ）」と呼んでいた。磯船の上から箱メガネで海中をのぞいてウニを探し、「タモ網」を用いて採る。全身で絶妙にバランスととりながら片方の足で櫂を操作し、タモあみを操る。「ノナ」用タモ網の網口は直径24～25cm、「ガンゼ」用の網口が18～22cmで、「ノナ」用がやや大きい。

「ノナ」も「ガンゼ」も、採取して水揚げしたあとすぐに作業場で「ウニむき」を行ない、身（卵巣）を取り出す。身を半分に割り、小型のスプーンを使って身を崩さないように取り出していく。「ウニむき」作業が終了と、殻を集めて専用の道具で殻を潰してビニール袋に入

れて一般廃棄物として処理する。

(会田理人)

(4) 鍛冶職人及び装蹄・蹄鉄に関する調査

山際は、2015年からの研究プロジェクト調査として、馬関係の技術の一種である装蹄について聞き取りを継続して進めている。特に、プラウなど畜力農具の製作技術に着目して、調査を行った。

① 明珍鉄工所の資料収集・建造物調査

明珍鉄工所は、150年ほど前に、宮城県から北海道へ移住した甲冑鍛冶の子傭助を初代として、恵庭市で開業した鉄工所である(写真7)。5代目まで鉄工所を守ってきたが、2022年5月、明珍鉄工所を閉業し、鍛冶場のある工場を解体する旨の情報を受けた。そこで、恵庭市郷土資料館の協力により、山際、会田、青柳、鈴木が鍛冶関係資料調査、工場の建造物調査、明珍武康氏(4代目)への鉄工所の略歴や営業時の道具及び工場内空間の利用方法等に係る聞き取り調査を行なった。なお、明珍鉄工所の開業から5代目までの歴史は恵庭市(1998:38-41)に詳しい。

本調査によって、約300件の鍛冶関係資料の収集、建物の平面図及び立面図の作成を行なった。これらの成果は、資料整理(収集資料1件ごとの写真撮影データや聞き取り調査情報の資料管理データベースへの情報付加)が終了次第、別途報告予定である。なお、2023年12月16日~2024年4月8日までの期間で、当館総合展示のクローズアップ展示5において、「職人の道具と技術ー鍛



写真7 明珍鉄工所外観(2022年5月31日撮影)

表3 明珍鉄工所調査概要

調査日	メンバー	内容	備考
2022年 5月24日	山際、 青柳、 鈴木明	資料や建物の現況把握、明珍武康氏への聞き取り調査	恵庭市郷土資料館も同行
2022年 5月31日	山際、 青柳、 鈴木明	資料の選定・収集、建物実測調査	北海道歴史文化財団も同行
2022年 6月29日	山際、 鈴木明	資料の収集、建物実測の追加調査	



図1 閉業時の明珍鉄工所 火床(ほど)周辺3Dスキャン
※物が多く連続した空間としてのスキャンが難しかったため、部分ごとに撮影を行った。



図2 解体直前の明珍鉄工所 内部3Dスキャン

冶職人ー」(担当:山際)として、収集資料のうち戦中戦後の道具を中心に、型板とその製品などについて紹介した。また、本調査において、鈴木は360度カメラによる撮影や、iPhone 12 proのLiDAR測量(アプリ:Polycam)を用いた3D空間記録を実験的に試みた(図1、2)。鍛冶作業において、工場内設備だけでなく、それぞれの道具や製作物の型などをどこに置き、どのような動きで職人が動くのかは重要な情報となるため、そうした空間情報の再現としても活用可能だと考えている。

(鈴木明世)

② 馬のクツについて

日本では「ウマノクツ(馬の沓)」というと、馬の蹄が割れたり、すべて傷つくのを防ぐための馬わらじや蹄鉄を指す。山際は、そのような馬のクツについて、金属の蹄鉄をあつかう装蹄師(国家試験による)と「湿地で使われた馬のクツ」に着目して聞き取り調査を行った。

■北海道博物館「記念ホール」壁面の蹄鉄

当館記念ホールの一壁面に、実際に使われてすり減った1569個の蹄鉄が打ちつけられている。

この蹄鉄については、北海道開拓記念館の開館当初には「全道各地から集められた」と説明してきた。しかし、当時、北海道装蹄師会の副会長から話のあった美瑛町の千葉装蹄所から一括して寄贈されたものであり、その装蹄所は兄弟で事業を行っていたことが明らかになった。

さらに、2022年には、蹄鉄の寄贈にかかわった装蹄所の現役装蹄師（弟）が来館され、壁面展示の経緯について聞き取りすることができた。

壁面の蹄鉄は、「すべて昭和4年生まれの子と16年生まれの私が作ったもので、兄は東京から講師に呼ばれるなど指導的な装蹄師だった。背丈ほども積まれた蹄鉄を開拓記念館へ送ったが、そのほとんどは自分がつくったもの」という。さらに「馬にとって第2の心臓と呼ばれるほど足は重要であることから、装蹄師は、馬の足に関する病気は獣医も聞きに来るほど専門的な知識が必要であった」という。記念ホールの蹄鉄は「すべて馬の足に合わせて作ったので形が違う。まるい前足・ややとがった後足、蹄鉄の地面側の左右に突起が丸くなっているのが内側（足でふんで傷つけないため）。馬には歩き癖があり、前足で後足を踏む癖のある馬には後足の蹄鉄の先に突起がある。外側が減りやすいのは人と同じ」など、蹄鉄を示しながら説明してくれた。

この聞き取り調査の一部は、ミュージアムカレッジ「馬が湿地ではいた靴」（2023年4月29日）で公表した。

■湿地でつかった馬のクツ（わらじ・かんじきなど）

当館には、明治から戦中頃までの装蹄師の教科書である書籍が収蔵されており、その中に雪上蹄鉄の記載はあるものの、湿地用の蹄鉄についての記載がない。そこで山際は、湿地でつかった馬のクツに関して調査を進めて



写真8 「湿地で使われた馬の靴」の展示

きた（山際 2021：75-75）。調査の成果は、洋式の湿地で使う「馬の靴」を北海道で日本風に発展させたと考え、当館第20回企画テーマ展「もっと！ あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～」(2023年2月25日～5月28日)第3章でトピック的に、「湿地で使われた『馬の靴』」として展示した(写真8)。

また、2022年の札幌市内において、美瑛町の元装蹄師（兄）から、「農耕馬の蹄鉄も作っていた。水田や湿地で使われていた蹄鉄は、作ったこともあり、昭和30年代まで作っていた」と12歳差の現役装蹄師（弟）では知り得ない聞き取りをすることができた。

(山際秀紀)

(5) 信仰、祭祀、民俗芸能、行事等に関する調査

① カワスソ信仰

尾曲と舟山は、2015年度からの5カ年で行った「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」以降、カワスソ神の調査を継続している。カワスソは（舟山 2022：1-1）、積丹町では来岸、余別、柂泊、神岬の4地区（第3図）において「カワシモサマ」と呼称されている神で、小正月にあたる1月15日から17日にかけて、各地区の女性がそれぞれ祭祀している信仰である。

この調査の目的は、過疎高齢社会のなかで、地域の信仰や年中行事など無形民俗文化財がどのように引き継がれていくのかを、祭祀の観察や参拝者への聞き取りをもとに記録することを主としている（舟山 2023a：4-5）。また、2020年からは、コロナ禍及び災害後における祭祀の実施状況に注目して調査している。

これまでの祭祀状況は、表4のとおりである。

表4 積丹町における「カワシモサマ」の祭祀状況

	来岸	余別	柂泊	神岬
2015年	○	○	合同祭	
2016年	○	○	○	○
2017年	○	○	○	○
2018年	○	○	○	○
2019年	○	○	○	○
2020年	○	○	○	○
2021年	×	×	×	×
2022年	△	×	△	△
2023年	△	×	△	△

4地区では、2021年にコロナ禍を受けて祭祀が中止されるまで各祭場で祭祀していた。

各地区の祭祀状況をみると、来岸では来岸会館を祭場とし、世話役が祭壇を整えて、16日の夕刻に地区の女性を招いて祭祀している。かつての祠は、海岸段丘上にあったことから、積雪のなか祭神を運ぶのが難しく、

秋に祭神を来岸会館へ遷しておき、雪解けをまって還していた。2020年、段丘下に祠を再建したことで（写真9）、移動の負担が解消されている。祭祀には、来岸寺住職が関わる（写真10）。祭りの次第は、まず読経があり、全員で参拝したあと、直会となる。コロナ禍以降、祠内で参拝するだけになっている。

余別の祭場は、余別地区コミュニティセンターで実施する。余別は4地区のなかで居住者が最も多く、3班に分けて祭祀している。具体的には、3班の内1班が世話役当番となり、残り2班の女性を招いて接待するという形態をとる。祭日は16日で、当番が午前中に祭神や奉納物を祠から祭場へ遷したあと、祭場の祭壇を整えるほか、料理を準備する。祭祀は夕刻に始まり、参拝者は祭神に参拝し、その後直会として当番から接待を受ける。散会后、当番は祭神とともにお籠もりし、17日午前祭神を祠へ還して1年間の当番の役割を終える。コロナ禍前の2020年の当番は2班であった。再開時の当番は3班の予定であったが、2022年に余別地区の婦人会が解散したことに伴い、1月の祭祀は行わず、雪解け後に当番が祠で参拝するようになっている。

柂泊と神岬は、2015年まで神岬会館（旧神岬小学校）で両地区の合同祭祀としていた。柂泊では、2016年から祭場を地区内の祠とし、16日午前地区の女性だけで参拝と直会を行うようになった。合同祭をやめた理由として、2015年夏に同地区の祠を新調したこと、合同祭場の神岬会館へ祭神を遷すことや参拝のための移動に難儀すること、そして参拝者も少数となり祠内での祭祀が可能になったことなどがあげられる。コロナ禍により2021年は祭祀を中止したが、翌年からは祭日に各人が銘々で参拝している。

神岬の祭日は16日午前で、2016年には合同祭と同様に地区の女性が祭神を旧校庭にある祠から神岬会館へ遷して祭祀していた。2017年は、祠で参拝した後、神岬会館で直会を行うようになった。2018年と2019年は、直会を個人宅で行っている。2020年には参拝者の減少に



写真9 積丹町来岸「カワシモサマ」の祠全景



写真10 来岸「カワシモサマ」の祭壇準備の写真

より、祠内で参拝している。

なお、これらの研究成果の一部は、2021年に女性民俗学研究会の会誌『女性と経験』にて報告した（尾曲2021：5-15）。

② 女夫龍神の祭祀

尾曲、鈴木、舟山は、当館の資料保存科学担当の高橋の協力を受け、2022年5月から2023年1月にかけて札幌市中央区の女夫龍神の祭祀について調査を進めた。調査では、毎月1日と毎年9月16日に行われる祭祀の観察と聞き取り調査を中心に、あわせて奉納物調査と建造物の現状を記録した（舟山ほか 2023：79-104、舟山2024：1-1）。

③ 民俗芸能

尾曲と舟山は、厚沢部町の富里鹿子舞と美和権現神楽調査を担当し、2019年から奉納状況を調査している。また、池田と舟山は、2020年から檜山郡の神楽を伝承している札幌村神社で聞き取り調査を進めている。さらに、2022年から舟山は、科学研究費補助金「北海道南西部の民俗芸能に関わる民俗文化財の活用と継承に向けての基礎的研究」（研究課題番号 22K01105）において、コロナ禍以降の北海道南西部の民俗芸能等の伝承保存会の活動状況を調査している（舟山 2023b：1-1、2023c：2-2）。

（舟山直治）

(6) 寒冷地における生活用具に関する調査

池田は、1997年に北海道開拓記念館（現在の北海道博物館）に赴任して以降、いわゆるかつての「ぼットン便所」で冬季に凍った糞尿の山を突き崩す棒に関心を持ち、実物が残っていればぜひ拝見したいと考えてきた。しかし、その棒には出会えない日々が続いていた。2012年4月、『北海道新聞』生活面において、この棒のことを話題にしたところ（池田 2012）、池田町のA氏より実物が残っているとの情報をいただいた。そして、2013年10月20日、池田町に赴きその棒を収集することができた。この棒は、現在、当館の総合展示室第3テーマ「北海道らしさの秘密」で展示させていただいている。

その後も、書籍でこの棒のことを紹介すると（池田 2013：136-137）、白糠町のB氏より自宅に現存しているとの手紙をいただき、2019年3月12日には白糠町のB氏宅で実物を拝見させていただいた。また、B氏は事細かに日記をつけており、B氏宅に水洗便所が取り付けられる2010年の日記には、「ぼットン便所」最後の冬の突き崩し作業のことが記録されていた。

本稿では、あらためてこの2件の棒の基本情報を記すとともに、聞き書きやB氏の日記から得られた情報を書き留めておきたい。

① 池田町で収集した棒について

【棒の基本情報】

長さ158cm。径（付け根）4cm。径（持ち手部分）約3.5cm。重さ9.5kg。材質は鉄。持ち手の部分がやや湾曲し、先端は尖っている。収蔵番号：165,984（写真11）。



写真11 池田町で収集した「糞突き棒」

【A氏からの聞き書き】

A氏は、岡山県金光町（現在の浅口市）出身。1966（昭和41）年に北海道池田町に嫁ぐ。瀬戸内から池田町に来て、冬の生活が快適と感じたという。岡山の冬の部屋は寒いが、池田町では「ぬかストーブ（A氏の表現。おが屑ストーブのこと）」を焚いていて、とても暖かいことを気に入った。A氏いわく、「岡山より池田の方が暮らしやすい」。

A氏は、嫁いだ際、この棒を見て、「一体これ何だろう」と思ったという。他の家のことは知らないが、家ではA氏が主に凍った糞尿を崩していた。鉄製の重い棒

で、その重みを利用して凍って盛り上がってきた便槽の糞尿を突いて崩した。床に穴が開いていただけの時は良かったが、金隠しの便器となってからは、割れないように注意して突かなければならなかった。なお、A氏は、これまで便器を割ってしまった経験はなかったという。A氏いわく、「家族が多いとすぐに糞が上へ上へと凍ってたまってくる。タケノコが生えてくるように上がってきた」。池田町では、 -20°C 前後の日が1か月ほどあり、 $-27\sim 28^{\circ}\text{C}$ になることもあったという。この棒は現在の建物に建て替えた1998年まで使用し、A氏の話では、90年以上使ってきたのではないかとのことであった。なお、A氏宅ではこの棒を「糞突き棒」と呼んでいた。

② 白糠町で調査を行った棒について

【棒の基本情報】

長さ133cm。径2cm。重さ3.7kg。材質は鉄。持ち手の部分は円形に加工。先端は7cm程の幅を有し、先に行くほど薄い刃状になっている（写真12）。



写真12 白糠町で調査した「糞突き棒」

【B氏『2010年当用日記』の記載事項】

1月20日（水） 天気：晴 気温： -8°C

トイレ作業→満洲嫩江時代を思い出（ママ）ず。一番、糞尿の塔をくずし方、積極的にやるのは鮫島さんの夫人だった。

2月6日（土） 天気：晴 気温： -17°C

○トイレの糞塔倒し。（2回目）

2月17日（水） 天気：晴 気温： -16°C

○糞塔 6時起床。朝は少し食欲あり。ツワリ感は少しあり。午前床に休む。午後も。午後糞塔ならず。そのせいか、 37° に一時上がる。しかし、きのうよりはよいと思う。夕方の食欲もきのうよりはわずか。がんばってなおそう。

【B氏からの聞き書き】

この棒は、雄別炭鉱で働いていた知人が、炭鉱が閉山した1970～1973（昭和45～48）年頃に、自ら図面を書いて鉄工所に製作を依頼したもので、1995年にその知人から譲り受けたものである。現在は、梃子代わりに使ったり、氷割りに使ったりと、重宝しているという。また、「糞塔」という言葉はB氏独特の言葉で、他から「糞塔」という表現を聞いたことはないとのこと。また、B氏はこの棒を「トイレ棒」と呼んでいた。なお、「糞塔倒し」は一冬で4～5回行う作業で、他の農家なども同じだったという。

（池田貴夫）

(7) 行商と食に関する調査

尾曲は本研究プロジェクト以前に行われていた「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」において、海岸部から内陸部へと魚を金属製の缶に入れて運ぶ女性の存在を確認した（尾曲 2018：195）。類似する事例を複数確認できたことから、この「ガンガン部隊」とも呼ばれることもある魚行商人の女性たちを通し、戦後の漁村地域・海産物出荷地における女性労働のあり方と、それに深くかかわってきた内陸部での魚食の実態について明らかにすることを目的とし、調査を継続している。

調査方法は、ガンガン部隊だった人や魚の行商人について見聞きした人への聞き書き、市町村史における記述や過去の新聞からの情報の抽出、行商に使用された道具の実態の把握が主である。

2022年度以降は、科学研究費助成事業「戦後北海道における女性の海産物行商と地域社会—「ガンガン部隊」の民俗史的研究」（研究課題番号 22K01106）において、調査を進めている。

これまでの調査地は、2022年度は函館市、浦幌町、宮城県亶理郡亶理町、2023年度は函館市、七飯町、浦幌町、千葉県立房総のむら（千葉県印旛郡栄町）等である。

いわゆるガンガン部隊として活動した人については、現在まで本人から話を聞くことはできていないが、かつて鉄道で乗り合わせた人の話を聞き取っている。また、亶理町ではリヤカーからトラックを利用した移動販売へと移行した人から話を聞くことができた。また、過去の新聞記事等から、函館方面にむかう行商専用列車が存在したことも確認している。

行商に使用した道具、特にガンガンについては、千葉県立房総のむらで実物を調査した（写真13）。ガンガンは道内でも複数の形態があったことが聞き書き調査からわかっているものの、実物を見つけることが困難な



写真13 ガンガン（個人蔵）

め、今後道外のガンガンについて情報収集する中で聞き書き調査の精度を高めていきたい。

これらの調査結果の詳細については、今後当館研究紀要等で報告するとともに、その一部は展示会等にて公開する予定である。

（尾曲香織）

(8) 北海道への移住者の建築文化に関する調査

鈴木は、建築史の立場から、大きなテーマとして明治時代以降の北海道への移住者が、どのような住居をつくり、それが時代の変化や北海道の気候環境にあわせてどのような変遷をしたかについて、郷里との比較をとおして調査を進めている。基本的には科学研究費助成事業である若手研究「明治期北海道移住者による農家建築の成立・変容にみる母村文化の影響に関する研究」（課題番号：19K15199 2019-2023）、基盤研究C「北海道への養蚕技術の流入と養蚕建築の変容過程」（課題番号：23K04227 2023-2026）を用いて、主に北海道開拓の村に移築復原・再現されている建造物を対象として調査を進めてきた。現段階では主に戦前を対象とする調査にとどまっているが、今後、戦中・戦後の社会状況の変化の中での、建造物等の歴史的変遷過程を見出す基盤となるものと位置づけている。

2021年度には、旧青山家漁家住宅を対象として郷里である山形県飽海郡遊佐町にある旧青山本邸の調査を行った。電報や日記などの記録から、現在の小樽市祝津に移住した青山家と遊佐の青山家が密接な連絡を取っていたことを示す書簡や電報、当主の日記帳などから、旧青山家漁家住宅母屋の建設時期や資材・職人の斡旋等の状況について確認することができ、それをもとに当館所蔵資料の調査を行うことで、概ねの建設経緯を判明させることができた。その成果の一部は、別途報告している（鈴木 2022a、2022b）。



写真14 旧岩間家農家住宅の外壁
※復原時に土壁の真壁を抑えるように横棧を設置している

2022年度には、旧岩間家農家住宅を対象として郷里である宮城県亶理町への調査を行った。岩間家は、1871（明治4）年に仙台藩亶理領から土族移民団の一員として、現在の伊達市に移住した畑作農家であり、郷里の大工によって建設されたことが既に判明していた。現地調査では、亶理町内に現存する明治期以前建設の住宅を数軒確認した。その結果、旧岩間家農家住宅で特徴的である土壁の柱と柱をつなぐ横棧と類似した痕跡や、板間にあるつくりつけの戸棚と同様の戸棚を確認するなど、具体的に建築様式の類似部分を確認することができた。一方で、横棧及び土壁については、それぞれ柱と柱をつなぐ物ではなかったこと、土壁の大壁であったことなど、旧岩間家農家住宅での復原とは異なる部分もあり、さらなる課題も得られた（写真14、15）。

2023年度には、旧岩間家農家住宅の旧所在地である伊達市において、旧所在地及びその周辺環境の現状確認、伊達市教育委員会の協力を得て旧三戸部家住宅の復元工事資料を確認し、建築様式に関するより詳細な情報を得られた。2022年度の調査と合わせ、調査成果は別途報告予定である。

また、養蚕業に着目した調査として、文献調査の成果は鈴木（2023）で簡易的に報告しているほか、2023年度に旭川市教育委員会の協力のもと、旭川市指定文化財である養蚕民家の調査を行った。今後その郷里である福島県との比較調査を行い、別途報告予定である。

（鈴木明世）

（9）その他

2020年度に、留萌市にあった留萌兼光鋸工業所で製造されていた鋸とその製造用具86点109点を収集した。また、2021年度は3軒から40件40点を収集した。各資料及びその情報については、北海道博物館研究紀要にて報告した（尾曲・池田 2020：139-154、尾曲・舟山



写真15 亶理町で確認した横棧つきの土壁の大壁
※横棧は柱から50mm程度しか出ている様子が分かる

2022：91-96）。

（尾曲香織）

4 おわりに：今後の課題

以上が、本研究プロジェクトにおける調査テーマごとの調査内容の中間報告である。

当館の前身のひとつである北海道開拓記念館の頃を含めて、主に生活文化に関わるこれまでの研究プロジェクトは、「『高度経済成長期』における道民生活の変化に関する基礎的研究」（2008～2011年度）、「モノをめぐる価値観の変遷とその多様性に関する近現代史―世代間対話の場としての博物館づくりに向けて―」（2012～2015年度）、「戦前・戦中・戦後における道民生活の変遷に関する聞き書き調査」（2015～2019年度）などがあり、これまで、当館をはじめ、北海道開拓の村の展示でそれぞれの研究成果を反映しているほか、大規模な展示改訂の検討に向けて研究成果の還元を意識したテーマを設定してきた。

一方で、当館の開館から現在まで、職員の世代交代により、主に開拓記念館からの収蔵資料のバックデータについて、次世代に伝えることが難しくなっている。そして、聞き取り対象の人たち（被調査者・インフォーマント）も世代交代等が進み、聞き取りが難しくなってきた。さらに、折悪しく、新型コロナウイルス感染症の蔓延時期とプロジェクト開始時期が重なり、多人数での面談・調査が困難となった。

他方で、本プロジェクトメンバーは、可能な範囲内で聞き取り調査を行い、それを公表につなげてきた。例えば、本稿で報告した「地域学習プログラム開発と巡回展事業」については、市町村と連携をとり速やかな研究成果の公開に繋げた成功例といえる。

今後の課題としては、多様なバックグラウンドを持つ

道民の生活・文化を示す「地域資源」としての博物館という観点から、収蔵資料や調査研究成果をいかにしてひろく道民に公開していくか、ということが挙げられる。博物館を地域資源として活用するには、資料を適切に保管して後世に残すだけでなく、付帯情報のアーカイブ化が重要であると認識している。例えば、プロジェクトでの聞き書き調査のほか、日常的なレファレンスによる道民との交流・対話は、新たな情報収集と記録の場となる。そのような過程の中で、学芸員の専門的知識をとおして精力的に集められた情報は、蓄積するだけでなく速やかに活用されることが望ましい。本研究プロジェクトにおいても研究成果をまとめていきたいと考える。

最後に、本研究プロジェクトの遂行にあたり、お世話になった多くの機関、ご協力を頂いた方々に、厚くお礼を申し上げます。

(山際秀紀)

文献

- 会田理人 2022. 利尻島の海女. 森のちゃれんがニュース 26: 4-5.
- 青柳かつら・山下俊介 2020. 少子高齢社会の地域学習コンテンツの開発: 名寄市智恵文の事例. 第131回日本森林学会大会学術講演集. 212-212.
- 青柳かつら・山下俊介・黄京性 2022. 少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発(Ⅲ): 高齢者の地域知を活用した地域学習と巡回展事業. 北海道博物館研究紀要 7: 47-66.
- 青柳かつら 2022. 窓鋸: 目立ての動画記録とスケッチ体験. 森のちゃれんがニュース 29: 2-2.
- 青柳かつら・山下俊介・黄京性 2023a. JSPS科研費18K01108 報告書1. 探してみよう! 地域のお宝 高齢者と協働する地域学習プログラム集. 北海道博物館.
- 青柳かつら・山下俊介・黄京性 2023b. JSPS科研費18K01108 報告書2. 高齢者のウェルビーイングを創成する地域学習コンテンツの開発: 北海道北部地域における回想法サロンと聞き取り調査・地域映像活用・認知症予防活動の記録. 北海道博物館.
- 池田貴夫 2012. 再発見・ふしぎ 北海道③ーモノの行き場、心の行き場(上)ー. 北海道新聞 2012年4月2日: 18-18.
- 池田貴夫 2013. なにこれ!? 北海博学. 北海道新聞社.
- 恵庭市 1997. 恵庭年代記: 恵庭百年記念誌
- 尾曲香織 2018. 新十津川における女性のくらしー結婚や出産に関わる習俗の変化についての一考察ー. 北海道博物館研究紀要 3: 193-199.
- 尾曲香織・池田貴夫 2020. 留萌兼光の鋸と鋸製道具ー2020年度寄贈資料からー. 北海道博物館研究紀要 6: 139-154.
- 尾曲香織 2021. 女性から女性へのアプローチー北海道における民俗調査の現状からー. 女性と経験 46: 5-15. 女性民俗学研究会.
- 尾曲香織・舟山直治 2022. 2021年度新着資料紹介ー生活文化関係資料を中心にー. 北海道博物館研究紀要 7: 91-96.
- 鈴木明世 2022a. 旧青山家漁家住宅の建築のみどころ. 北海道開拓の村 建造物紹介① 北海道のニシン漁と青山家ー旧青山家漁家住宅の魅力. 88-100. 北海道博物館.
- 鈴木明世 2022b. 青山家母屋の焼失と再建. 北海道開拓の村 建造物紹介① 北海道のニシン漁と青山家ー旧青山家漁家住宅の魅力. 101-101. 北海道博物館.
- 鈴木明世 2023. 養蚕業の建築からみる本州以南とのつながりと北海道らしさ. 森のちゃれんがニュース 32: 4-5.
- 舟山直治 2022. カワスソ神の伝承. 文化情報 389: 1-1. 北海道文化財保護協会.
- 舟山直治 2023a. これまでの調査研究活動について. 森のちゃれんがニュース 31: 4-5.
- 舟山直治 2023b. 正月行事「門祓い」. 文化情報 391: 1-1. 北海道文化財保護協会.
- 舟山直治 2023c. コロナ禍明けの祭礼と民俗芸能. 文化情報 395: 2-2. 北海道文化財保護協会.
- 舟山直治 2024. 女夫龍神について. 文化情報 397: 1-1. 北海道文化財保護協会.
- 舟山直治・尾曲香織・鈴木明世・高橋佳久 2023. 女夫龍神の祭祀ー家族による信仰の伝承と祭祀に関わる社殿の現況調査についてー. 北海道博物館研究紀要 8: 79-104.
- 山際秀紀 2018. りんご園の四季. 北海道博物館第12回企画テーマ展「りんご農家の道具」リーフレット: 2-3.
- 山際秀紀 2020. リンゴ農家の道具の収集と展示、その後ー「掛け袋(左袋)を探してー. 森のちゃれんがニュース 22: 4-5.
- 山際秀紀 2021. あっちこっち湿地ー自然と歴史をめぐる旅ーGUIDE BOOK. 北海道博物館 第7回特別展: 70-78.
- 山際秀紀 2022a. 北海道の博物館等施設に保存されている上田式播種器について. 北の技術文化 30: 79-88. 北海道産業考古学会.
- 山際秀紀 2022b. うまい米No.1への歴史「舟形網」の秘密. 森のちゃれんがニュース 31. 北海道博物館: 3-3.



図3 本稿における調査対象地等
 ※地名の後ろに記載された()は、「3 各テーマの調査報告」の報告番号に対応している。
 ※積丹町の拡大地図は、国土地理院「地理院地図Vector」で作成した地図に筆者加筆。

Oral History of Lifestyle Changes during Wartime and Postwar Hokkaido Interim Report

YAMAGIWA Hideki, IKEDA Takao, AIDA Masato, AOYAGI Katsura, OMAGARI Kaori, FUNAYAMA Naoji and SUZUKI Akiyo

This paper is an interim report on Oral History Survey on Changes in Lifestyles during Wartime and Postwar Hokkaido, a research project currently underway at Hokkaido Museum. (Research period: fiscal 2020-2024.)

Our goal is to record oral reports of the changes in Hokkaido-developed industries, livelihoods, and lifestyle culture during the turbulent World War II wartime and postwar periods, the reconstruction process, and the following period of high economic growth. As necessary, this project investigates prewar, modern-day, and other periods. Furthermore, each member has established an individual research theme focused on their area of expertise: (1) agricultural tools and machinery;

(2) people's memories of agriculture, forestry, commerce, industry, and lifestyle culture during the Showa period; (3) herring fishery and shore-based fishery in Hokkaido's Sea of Japan coastal areas; (4) iron industry, horseshoeing, and smithing; (5) faith, rituals, folk entertainment, and events; (6) household items in cold regions; (7) itinerant trading and food; (8) architectural culture of immigrants to Hokkaido.

In the future, we will broadly share our results with residents of Hokkaido, with plans including exhibitions and further projects intended to increase knowledge and awareness of this subject at Hokkaido Museum.